

稲荷様の年始まわり

田 中 裕 子

はじめに

今年度当館では、さきたま風土記の丘企画展「キツネは踊る～お米がたくさんとれますように～」を開催した。企画の段階では、今回の凶作はとても思い及ばず、標記の展示はタイムリーな企画となってしまった。この企画展の主旨は、以下のとおりである。

かつて、人々は五穀の豊作を願って単に技術的な向上を目指すばかりでなく、神祭りや様々な儀礼を行ってきた。この農業の神は、「田の神」などといわれるもので、農事の節目毎にわたしたちの近くに降りて農作業を見守ってくれるのだと信じられていた。

科学が発達した現在でも、天災の恐ろしさは計りしれないものがあり、この度のような凶作にでもなれば神にすぎる想いを抱くものであるが、日常の農作業を進める上では神の存在は忘れがちである。

こうした、田の神に対する祈りの姿はさまざまであるが、今年度の企画展では稲荷神の使いであるキツネの存在を通してこれらをわかりやすく紹介した。

そこで、この稿では企画展を振り返るとともに展示の中で紹介できなかった、行田市利田に伝承している行事「稲荷様の年始まわり」について述べることにする。

右の写真は、秩父神楽第15座「稲作」の一場面であるが、なぜ神楽にキツネが登場するのかは一般的にはあまり知られていないようだ。

展示では、稲荷神社に祀られている稲荷神は五穀（米・麦・豆などの穀物）を司どる神で、その使いがキツネなのだということを、こうした神楽の演目を紹介することで印象づけることができたのではないだろうか。

キツネが登場する神楽は子供が見ても楽しめるので、会期中の講演会でも前田社中（代表 前田益夫氏）の協力を得て、当館敷地内にある民家で「神明のしんめい たねまき種蒔」を上演した。

また親しみやすい事例として、油揚げのお寿司を「おいなりさん（いなりずし稲荷鮓）」というのはなぜかという疑問を投げかけて、このことも展示で表現した。

こうしたことによって、稲荷神—キツネ—豊作祈願という連係を幾分かでも知らせることができたと考えている。



秩父神楽「稲作」（写真提供 栃原嗣雄氏）

1 豊作をもたらすキツネ

埼玉県にも、キツネに化かされたという話が数多く伝えられている。このように、キツネはその賢さゆえに人を化かす狡猾な動物だというイメージがあるが、一方で稲荷神の使いであり、豊作をもたらす動物なのだとされている。

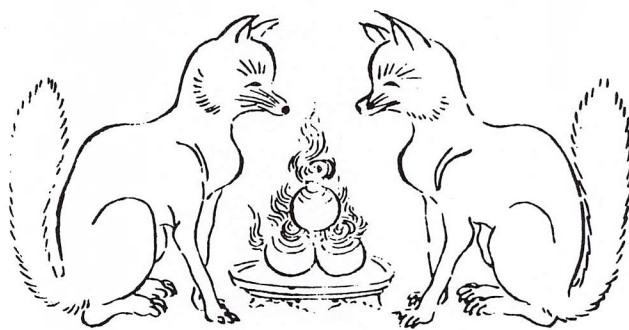
その一例として、こんな話が志木市引又^{ひきまた}に伝わっている。

江戸時代半ばのこと、畑仕事をしていた助右衛門の背中に突然大きな白狐^{びやっこ}がおぶさってきた。助右衛門がジッと見ていると、きつねはヒョイと肩から飛降りて茂みに姿を消してしまった。助右衛門は不思議に思って村人にこのことを話すと、人々は白狐を稲荷様の使いと信じていたので、「今年は豊作になるぞ。」と喜んで、助右衛門が狐に出会ったところに稲荷社を立てたのだという。これが志木市引又の村山稲荷に伝わる縁起である。

この話は、白い狐の出現を、田の神の使いが現われたと解釈したものだ。田の神は、春に山から降りてきて農作業を見守り、秋には山に帰っていく存在である。キツネの習俗も子育ての関係から、山から降りてきて人里近くに生活する時期があるので、この事例もこうしたことが下地となっていたのかもしれない。ともあれ、昨年のような凶作が続いていた時ならば、白狐の訪れはどんなに吉兆と感じられたであろうか。

また、春日部市赤沼地区に伝わる赤沼の獅子舞は豊作祈願祭または収穫感謝祭に奉納されてきたが、その余興に行われる舞にもキツネが登場するのである。狐はおどけた仕草をしながら観客をからかい、神前に供えた重箱を持って中の赤飯を人々にふるまう。そして、最後に観客の中から男の子を一人さらって神前まで連れ去る。この子にはお土産を渡して、すぐに親元に返すが、この日キツネにさらわれると福が授かるといわれているのである。

本来、稲荷社は農作業がよく見える小高い塚などに建てられることが多いようである。こうした場所は神聖な場所として区別されるために人々が立入ることも少なくなる。そのため、あたりは藪塚となり、実際にキツネが住み着くことにもなったのではないだろうか。稲荷社に参拝してキツネに出会った人は、案外大勢いたのかもしれない。



宝珠とキツネ



子どもをさらうキツネ（春日部市赤沼）

こうしたことも、稲荷神とキツネの結び付きをますます強めることになったのであろう。

「狐を農業と縁の深い動物とし、そのなかの特に霊ありと認めるものを、京の稲荷山の神と結び付けて、崇敬しようとするやうになった原因は、さう深いところに求めようとするに及ばず、単に祭田の近くに又は田の間に、そんな人為の未開地があったといふだけでも、十分のやうに私は思っ
て居る。強ひてそれ以上に付加へるとすれば、以前は狐が今よりもずっと多かったこと、彼の挙動にはやや他獣と変わったところがあり、人に見られたと思ふとすぐに逃鼠せず、返って立止まってい
っぺんは目を見合せようとする事、それから又食制や子育ての関係から、季節によって頻りに人
里に去来することなどを列挙してもよい。」 柳田國男『田の神の祭り方』（定本13）

2 稲荷様の年始まわり

この行事を伝承している行田市大字利田は、市の東南部に位置している。当地域の主な生業は、米・麦を中心とした農業で、戦前は養蚕も盛んに行われていた。現在でも約半数が兼業農家として



伊奈利神社へ参拝

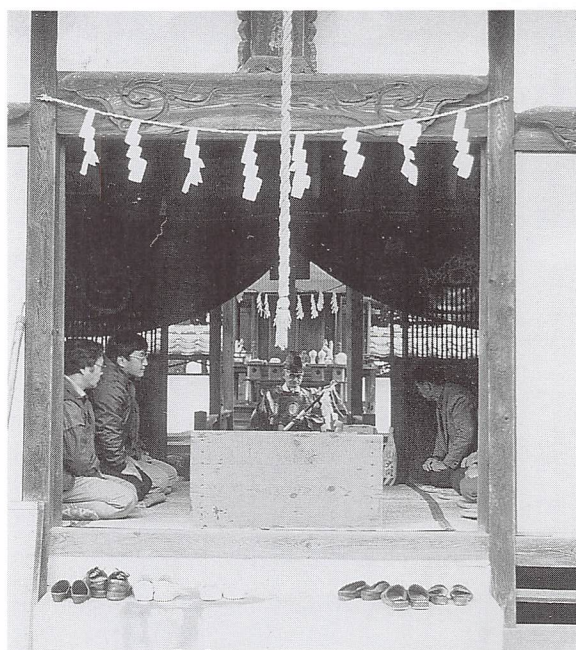
農業に携わっている。その中心となる神社の社名は「伊奈利」と表記され、農家からは豊作の神として、町場の人々からは商売繁盛の神として厚く信仰されてきた。

当社の氏子区域は利田の全域で、戦前の全戸数は33戸であったが、戦後になり分家が増加しさらに近年は他所からの転居者もあり、昭和61年には約50戸、平成5年には約60戸と倍増している。

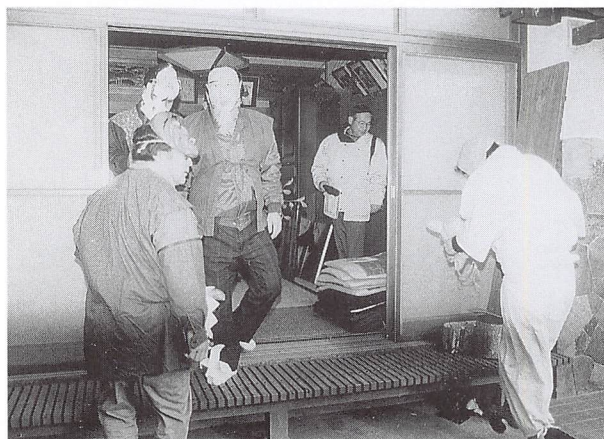
その氏子たちは、伊奈利様の使いであるキツネを「オトカ様」と呼び、「オトカ様は犬を恐がるから。」とあって、昔からここでは犬を飼うことが禁忌とされてきた。また「キツネは獅子に負けてしまうから獅子舞はやってはいけない。」とも伝えるなど「伊奈利神社」を身近な存在として大切に祀ってきたのである。「伊奈利様の年始まわり」は、こんな神社に伝えられている。

この行事は、村の若者が扮した「稲荷様」の一行が氏子の家々を一軒づつまわり、豊作を祈願して新年の挨拶と厄払いを行う正月行事である。

本来は、正月5日（以前は月遅れ）に行われていたが、現在では会社に勤務する人が多くなった



祓を受ける



ことから、期日を1月3日に変更して行っている。昔は、嫁いだ人も皆この日にあわせて帰ってきたものだが、今ではこうしたこともなくなっているという。

一行は、「シオフリ」と称する榊を持った人を先頭にして、あとは「稲荷」「白狐」「天狗」「オカメ」「ヒョットコ」の面を付けた5人の計6人から成る。豊作を願う行事らしく、五穀を司どる稲荷神とその使いとされるオトカ様が加わっているのである。

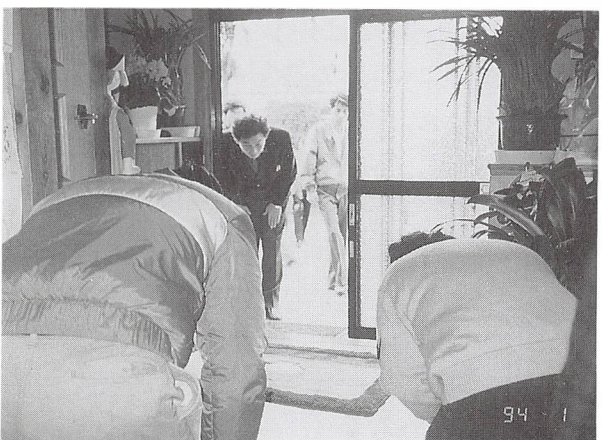
正月3日の朝、午前9時の行事開始に間に合うように神社の境内に村人が続々と集ってくる。各自参拝を済ませると、祝儀を納める。これらの人々は、本殿の中で一連の式が行われている間、境内の焚き火で暖をとりながら待つことになる。

またこれより早く、行事に先立って神主が真新しい青竹を用いて「一行」が持つ幣束を作る。幣束は、古くから当日に用意するのが慣例であるという。

9時になると行事が始まる。

まず、世話人4人と年番4人、それに稲荷神などに扮する「一行」6人が社殿にあがる。神職が祝詞を奏上し、玉串を奉納し、祓をするなどの一連の儀式がとりおこなわれる。衣裳や幣束なども一緒に祓を受けてから使用されるのである。式が済むと、一行はそれぞれの衣裳に着替え、ここではじめて稲荷神等に転じることになる。

シオフリは、清めとして使う塩と榊のシメ（幣束）を持ち、「稲荷」「白狐」「天狗」「オカメ」の4人は青竹製のシメを持つ。そのなかでヒョットコだけはスリンボと呼ばれる約50cmの男根状の棒を持つ。ヒョットコが持っているこの棒は、婦人に押し付けると安産まじないの呪になるといい、かつては若い嫁には必ずこれに触れさせて安産を祈願したものだという。ヒョットコ役は、新しく嫁さんがくると、面白がって、その人の腹にこの棒を押し



付けたりしていたという。半ば、^{なか}からかうようでもあり、実際には若い人は嫌がって逃げてしまうという。

衣裳は、普段着の上に羽織るだけ、履き物は決まっていないが着脱簡単なツッカケを履いていくことが多い。雨あるいは雪が降ってもこの行事は実施されるので、雨天のぬかるみの時は下駄履きのため苦勞して歩いたものだという。行事が月遅れであった頃には、2月に1尺位の積雪も珍しくはなかったというからおさらである。道も舗装ではなかったので藁を敷くなどして養生していたようだ。

こうして一行の身支度が整うと、神社に集った村人全員に御神酒が振舞われる。ここから、「年始回り」が始まるのである。

村の回りかたにはふたとおりあって、その年の恵方（アキノカタ）を神主がみて、表もしくは裏からというふう^にに年毎に回りかたを変えている。ちなみに今年はウラであった。氏子の家はすべて回るが、ブクが掛かっている家（前年に葬儀のあった家）は、神社にも行かず行事にも参加しないので回り順からは外すことになっている。

行列の先頭に立つのは先触^{さきふれ}となる子供たちで、「ドンドンカッカ、ドンカッカ」と太鼓を叩き、「来ますよ。来ますよ。」などと叫びながら、一行が間もなくやってくることを村中に知らせるのである。とくに「オトカ様」が来るのを知らせるのだともいう。毎年7～8人の子供が参加する。男の子が多いが、女の子ではいけないということはない。現在は恥かしさが先に立つのか、元気な声はあまり聞かれないようである。先触の後に一行が、そしてその他の氏子一同は、その後から続く。

根岸氏が子どもの時は、当日、太鼓の音が聞えてくると「今にオトカ様^が来るよ・・・」と大人にいられていた。「稲荷様^が来る。」という表現で



はなかったようだ。面を付けた一行が訪れて家中を歩き回っても恐くはなかった。むしろ、日常とは違った行為振舞いが嬉しかったという。この行事は、子供たちの楽しみとなっていたのである。

一行は目指す家に着くと、縁側から、履き物を脱いで座敷に上がる。昔から土足のまま家に上がったことはないという。なお、家に入る時は、一同が声を揃えて「おめでとうございます。」と言う。

部屋に入ったシオフリは、昔は家の中にまず塩を撒いた。あいている座敷はどの部屋にも撒いてしまっていた。今は家が新しくなったので、塩を撒かれることを嫌う傾向にあるため、その代わりに、床の間に塩をヒトポッチづつ置いていく。

一行は、幣束を振りながら家の中を大体ぐるっとひと回りして祓ってあるき、家族も祓い終わると、縁側から帰っていく。この様に一行の出入りが縁側であるということには意味があるものと思われる。

この間、お供として一行の後に付いている人たちは、玄関にまわってその家の家族と新年の挨拶を交わすことになっている。

その家の家族の立場からすれば、一行を迎えるのと同時に玄関に出て、村人一同と挨拶を交わさなければならないのであるから非常に慌しい。1軒に費やす時間はほんの数分であるから、厳粛にというよりどさくさに紛れて祓いを受けている感がある。

お供の人たちは、稲荷様より先にいってはいけなさとされているが、時としてお供の方が先に立ってしまうこともある。たとえば、途中で酒席が用意されていたりすると、一行はそこで頂戴することになるが、他の人は次の家の前まで行って待っている。そうして、けっして先に新年の挨拶をすることはしない。

お供として付いて回る人は、各家庭からひとり

は出る。こういう人も各々自分の家の順番が近づくと急いで自宅に帰り、家族とともに一行のやってくるのを待ち受ける。そうして稲荷様の祓を受けるのである。それが終わると再びお供の列に加わる。したがって、この一団は何時も誰かが入れ替わり立ち替わりしていることになるのである。

このように村中の家約60軒をまわり終えて神社まで帰ってくると、この行事も終了である。冷えきった体を暖めてくれるのは、キツネにちなんだ油揚げの入った豆腐汁である。これをすすり、手締めをして行事は終了する。

この豆腐汁は、一行が神社を出発してから年番が準備を始めたものである。皆が年始回りを終えて神社に戻るまでに、白菜と豆腐と油揚げを使ってこの豆腐汁を作っておくのである。

稲荷様を始めとするこの一行には、毎年氏子が交代で扮することになっている。

現在稲荷様に扮するのは30代から40代の人であるが、大正から昭和の初期にかけては、10代の若者が扮するのが常であったようだ。根岸氏も17・18才の時は毎年のように面をかぶったという。その頃の若い者は皆が進んでやりたがったものだという。他に遊びがなかったのでこの行事を心待ちにしていたのかも知れない。そのころは、神社に行くとき大体の人数が決まるので、その場で役割を決めた。誰も嫌がることはなかったからだという。

今はなりてがいないので事前に決めておかなければならない。世話人から「今年も6人選んでくれ。」と話があると、30～40代の人の会などから選ばれる。今は、跡取であっても若いうちは参加しないが、そういう人も30代になると参加せざるを得ないようになるので、どうしてもこの年齢層に片寄りがちになるようだ。

一行が付ける面は長年使用していて、傷みが激しくなった時点で何度か塗り替えをしている。衣裳も作り替える。かつては婦人会の人が奉仕して作ったものだという。今使用しているのは戦前から使っている衣裳である。年に一度だけしか着ないので長持ちしている。伊奈利神社の本殿は1度火災で消失しているが、この行事に使う面や道具は幸いにも残ったという。しかし、何時ごろから使われているのかは不明である。

この行事を実際に調査して、村中の人との正月の挨拶が半日で済ませられること、そのうえ互いに年賀を持っていかなくても良いことなど、合理的な点に感心させられた。また、一巡することで村中の様子あるいは各家庭の生活ぶりがわかることなども、互いの活動を理解する上で役立っている



主に女性が豆腐汁を作る



手締めで行事は終了する

るのかもしれないと感じた。さらに、ふだん付き合いの無い家にも出掛けて、その家人と挨拶を交わすことも有意義なことといえるのではないだろうか。

村中の人が一団となってやってきたうえに一行は部屋にも入るのであるから、プライバシーを侵害されることにもなりかねないが、整理整頓が励行されるなど案外功績の方が大きいようだ。

最近では、他の地域からまったく新しく転居してきた人も多くなってきたそうだが、そういう人も、こうした村の活動が充実しているせいか、行事に積極的に参加しているという。

村の様子がよくわかることなどが、村の運営を潤滑に行うことに繋がっているのではないかと思われるのである。

「稲荷様の年始まわり」は、生業だけでなくムラの社会生活を保つうえでも、いろいろな意味で豊作を祈願するに相応しい行事であるといえよう。

3 養蚕講のオトカ様

初午の日などには、農家では稲作・麦作・養蚕などの生業の豊作を祈願して、また商人は商売繁盛を祈願して、稲荷社から眷属像としての小さなオトカ様を借りうけてきたものである。

行田市利田のこの伊奈利神社でも、かつて周囲の養蚕農家にこのオトカ様を貸出していた。しかし、貸出すのは初午の日ではなく毎年4月15日で、ちょうど春蚕の掃き立て作業に取りかかる前の時期である。その養蚕農家では、蚕があたるようにオトカ様を左右の対で1組借りていく。四里四方から200～300人の講中がきたという。各家庭では、借りてきたこのオトカ様を神棚に並べてお祀りしていた。

願いがかなって豊作になった農家は、10月15日にお礼のために再度神社を訪れる。この時期は晩秋蚕の上簇・出荷を終えた時期である。この時にオトカ様を倍に増やして返すので、稲荷社のオトカ様は年毎に増加して一時は、社務所に納まらないほどの量だったそうである。



もとぐら
本倉稲荷のキツネ（吹上町）



陶製のオトカ様

伊奈利神社御来歴にも同様のことが明記されている。

- 一 養蚕講ハ毎年四月十五日執行ス
- 一 講金ハ一名金三十銭トス
- 一 講員ニハ養蚕守護札家内安全祈祷掃立紙及弁当ヲ呈ス。
- 一 眷属一組ヲ貸与シ十月十五日一組ヲ殖シ返納ス

この養蚕講がいつ頃から存在したのかは不明であるが、同社には明治38年（1905）銘の繭の奉納額があり、この頃が最盛期と思われる。また、

「北埼玉郡における養蚕は、明治末期から大正年間にかけて急速に発展し、昭和に入ってその全盛期を迎えたが、戦後は急速に衰退したことがうかがわれる。」（大明敦「養蚕講について－伊奈利神社（行田市利田）の場合－」『神社調査予報（二）』）という記述が端的に示しているように、一時的に、現金収入に結びつく生業として爆発的に広まったことも、この養蚕講の隆盛に拍車を掛けたのであろう。

養蚕が「急速に衰退した」要因は、電力の揚水機の普及により畑地（桑畑）を陸田化することが可能になると同時に、戦時中に絹糸の需要が伸び悩んだためといわれている。

現在の伊奈利神社には、色彩が僅かに残る古いオトカ様が残されている。その数は千体程であろうか。他はすでに処分されていて、盛んだったという養蚕講の面影はあまり無い。

養蚕講のオトカ様もまた、豊作をもたらすキツネとして親しまれてきたのである。

4 伊奈利神社の祭礼

最後に伊奈利神社の年間の祭礼を付記しておく。祭日はいずれも新暦表記。現在では、皆の都合の良い日曜日に設定されることが多い。

各行事は、氏子の中から神社の運営にあたる総代4名と、境内の清掃や祭事の世話にあたる輪番制の年番4人がでて運営している。

◆元旦祭＝稲荷様の年始まわり（1月5日）

◆初午（2月6日頃）

この日は稲荷様の祭礼日で、氏子全員で五目飯をともに食べる。各氏子から米2合と諸材料費300円程を集めて、年番が寄り集って五目飯を作る。年番もいつもは男性が行事に参加することが多いがこの時ばかりは女性が参加する。女性の活躍の場ということもできようか。また、はじめて行事に参加する人も料理ならうちとけやすいということもある。

夕刻には料理の準備も整って、氏子たちが神社に集ってくる。「稲荷大明神」という掛軸をだして、そこに五目飯だけを供え、会食が始る。

◆勧学祭（3月下旬）

新年度に小学校に入学する子供を祝う行事である。対象になる子どもたちは親とともに神社に招かれて、神主から祈祷を受ける。各氏子から祝儀金を集めて、子どもたちに学用品を贈る。

◆日待祭（4月15日）

前述した養蚕講の春の祭礼日である。現在は神主や世話人等だけが寄って祈禱をする。

◆大祓式（7月5日頃）

夏越（ナゴシ）の行事である。この前日、神主から授かったヒトガタを世話人が各氏子に配る。氏子はそのに家族の名前を書いておく。それらを神社に集めて神主が祈禱をし、疫祓いをする行事である。

麦を収穫したあとに行われるので、麦の感謝祭ともいわれており、このためにこの行事をムギバツともいう。

◆例祭（9月4日）

◆日待祭（10月15日）

養蚕講の秋の祭礼である。

◆新嘗祭（11月23日）

◆初午

五目飯を作る。12月の初午はオトリ様の前日。行事の内容は2月の初午の時と同じ。

◆大祓式（12月下旬）

ミソカッパライ（晦日祓い）の幣束と正月のお飾り（ハッチョウジメ・カマジメ）等を氏子に配り、新年を迎える準備をする。

以上、行田市利田に伝承している行事「稲荷様の年始まわり」を中心に、豊作を祈願する事例をいくつか紹介した。

今回の調査では、次の方々に貴重なお話を伺うことができた。また、利田の皆さんには正月3日の行事の当日に快く受入れていただいた。末筆ながら、ここに深く感謝いたします。

根 岸 春太郎 氏 明治43年生れ 行田市利田545

太 田 昭 一 氏 昭和 2年生れ 行田市利田438

参考文献

鈴木棠三編 1975 全国昔話資料集成20「武蔵川越昔話集」

菲塚一三郎 1973 「埼玉県伝説集成（上巻・自然編）一分類と解説」 北辰図書出版

秩父神社神楽保存会 1978 「秩父神楽－秩父神社付属神代神楽－」 言叢社

柳田國男 「田の神の祭り方」（定本13）

埼玉県神社調査団編 1984 大明教「養蚕講について－伊奈利神社（行田市利田）の場合－」『神社調査予報（二）』